

## 戦争体験談

匿名(女性)

昭和19年春、都合により1日ばかりで列車にゆられ、まだうず高く積もった雪を見て、茫然とし直江津駅へ下り立ちました。

戦中、戦後時代を私なりに回想しながら、一筆してみました。強制疎開者として当地に参り、あれから63年の歳月が流れました。(12才)

昭和16年、戦争が勃発し都会では毎日のように、空襲警報発令で通常時には防空頭巾(綿入れの帽子)、水筒、スカートは禁止!もんぺをはき、胸には住所、氏名、何型の名札。だんだんと戦争が激しくなり毎夜、着の身着のままの服装でいつ防空壕(敷地の下に深く穴を掘り、空から見えないような隠れ家で、食糧品も貯蔵)に入っても良いように、電灯には黒い布を覆い、夜空は明るく、飛行機が飛び、恐怖の日々でした。母たちは連日隣組の方たちと、長い棒の先に水でぬらした布を巻きつけ、火の粉を掃う動作の訓練をしておりました。その後の「炊き出し」のおにぎりを食べるのが、うれしかった事を記憶しております。(11才)

昭和18年頃には、学童疎開となり親元を離れ、田舎のお寺へと先生方と疎開し、そのまま終戦になっても親と逢う事なく、どうしていらっしゃるのかと心が痛みます。

昭和20年3月、大空襲で都会は火の海となり親子して隅田川へ飛び込み、向こう岸に這い上がった時には別々になり、川は赤く大勢の人の呻き声とで地獄のようだったとの事!おぞましい時代でした。戦争とは恐ろしく悲惨なものです。15、6歳の少年は学徒動員として、国家の為に「万歳三唱」して自爆なされ・・・、偉いというか、その当時はそのような教育を受けたのでしょうか・・・。愛しい夫、可愛い我が子の為、浅草寺付近で一人一人の暖かい気持ちを赤い糸に託し、玉結びにして千人針とし、晒を作り胴体に巻き、「露営の歌」を歌い日の丸の旗を振り振り見送っていた姿が、子供心に今でも目に焼きついております。我が子を亡くしても決して涙を見せず、軍国の母として崇められた時代です。

戦争とは人の心も変えてしまうものですね。空からは降るように投下される爆弾!残骸を踏み越えながら逃げ惑う人々に。地獄!

昭和20年春には女学生として、上級生の方たちの軍部品を作業とする為、工場へ行っている間、学校では田畑などの食糧作りに留守番でした。また、指輪、帯止め、ネックレス、貴金属品はすべて没収され、軍へ供出された時代です。また「物々交換時代」でもありました。着物、帯など食糧品と交換です。食べ盛りの私たち兄弟の為に瀧町から米を仕入れてきたのに、直江津駅の保安官の方に「やみ屋」と間違われ、没収されてしまいました。

戦時中は団結、思いやり、忍耐力もありました。今は平和の世の中で華やかな服装、おいしい食べ物、何事も電化製品と感謝です。コンサートもでき、青春を謳歌でき、幸せな時代になりました。いつまでも幸せが続きますように・・・

今更忌まわしい戦争の悲惨な話をして若い方には理解、受け止める事が出来なんでしょう。

でも、<sup>あ</sup>敢えてこのような時代があったという事を少しでも知ってほしいと思います。決して決して戦争（いじめ）などないように祈ります。

昭和 20 年 8 月 15 日終戦になっても亡き母は都会に帰る事なく安住<sup>した</sup>致しました。上越市のやさしい思いやりのある方々のおかげと感謝しております。私も山あり海ありの上越市に永住させて頂きます。心より感謝申し上げます。